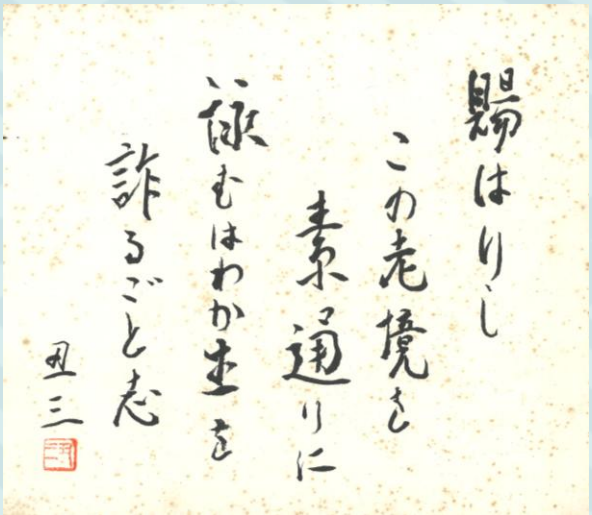
自筆色紙(No.7)

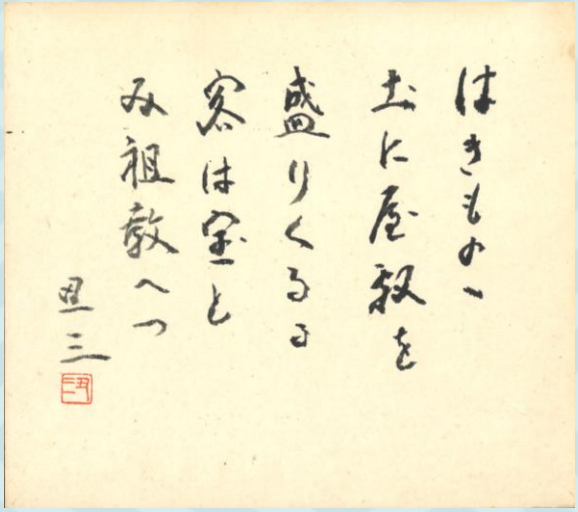
「賜(たま)はりしこの老境を素通りに詠むはわか生(よ)を詐(いつは)るごと志(し)」

この歌は第6歌集『歳月』に載っている歌で、80歳に近付く頃の作品である。老境に入ることさえ「賜はり」と謙譲語で詠み、老いを嘆かず新鮮な日々と捉え、ますます好奇心をもって老いを受け止めている。老いを素通りするのは自分の生き方に嘘をつくと、与えられた生を謙虚に受け容れる先生の誠実なお人柄が窺える。



星野丑三 1909-2001

1909年、現・埼玉県さいたま市生まれ。1929年、「香蘭(こうらん)」に入会、村野(むらの)次郎(じろう)に師事する。1946年、「鶏苑」創刊に参加するが、同誌の終刊により1967年に「香蘭」に復帰、1972年、選者となり、村野の没後1980年に「香蘭」 代表に就任。亡くなるまで代表として活躍した。埼玉県歌人会常任理事。日本歌人クラブ賞受賞。埼玉県歌人会賞受賞。

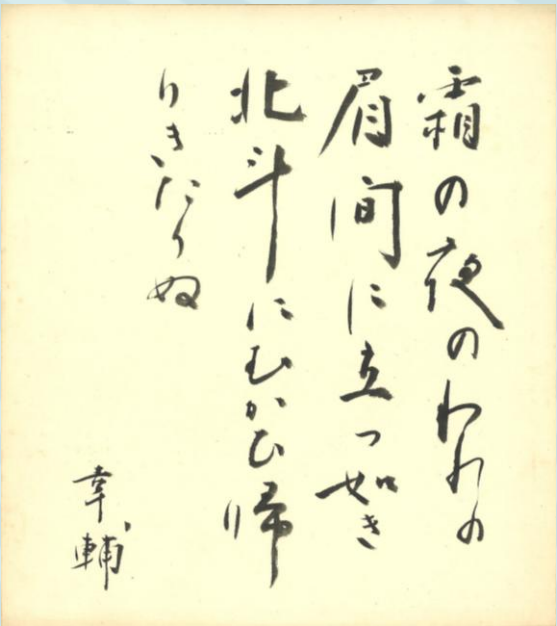


自筆短冊(No.8)

「はきものゝ土に屋敷を盛りくるる客は宝とみ祖(おや)教へつ」

履きものにつけてくる土が、屋敷を盛り上げ繁盛させてくれる、客は宝であるという先祖の教えをしっかり守っていた先生。誠実で謙虚で温厚な人柄は、どのお歌にもよく表れている。何よりも人を大事にし、人との関係を栄養にしていこうとする謙虚さが尊い。周辺の人に慕われた一生であった。

【短歌解説:村上美智代氏】



自筆色紙(No.15)

「霜の夜のわれの眉間に立つ如き北斗にむかひ帰りきたりぬ」

歌集『幻影』「北斗」8首の第7首。霜の降りた夜に見上げると、逆立った北斗七星が低く見える。私の眉間にさながら立つ感じで、歩いてゆくと迫ってきて、家に帰ったと歌う。凜とした気息が伝わってくる。いささか1日の疲れを覚えたのであろうか。帰宅のおりに見た北斗七星の姿に鞭打たれて、こころが動いた。

鈴木幸輔 1911-1980

1911年、現・秋田県大仙市生まれ。1935年に「多磨」の創刊に参加し、北原白秋に師事する。1943年、浦和市に転居する。1953年に「コスモス」創刊に参加、「コスモス」退会後に「長風」を創刊して、主宰となる。埼玉県歌人会理事。第二歌集『長風』が日本歌人クラブ推薦歌集に選ばれる。

自筆短冊(No.14)

「よく見れば色小鳥ゐてかぎりなく雨木隠りにあらはれて飛ぶ」

歌集『禽獣』「青また依然」33首の中の小見出し、「山は漆紅葉」の第8首。今まで気づかないでいたが、よく見ると、色の美しい小鳥がかぎりなくいて、雨の降る木群にあらわれて次次に飛び立って行くという内容の歌。思わぬ美の発見と驚きがある。「色小鳥」や「雨木隠り」は工夫された詩句。本歌は、別所沼公園にある歌碑の歌でもある。

【短歌解説：本木巧氏】